

序 言

近鉄西大寺駅の北東一帯は、奈良時代後半には西隆寺が建立された場所でもある。絵図などによると、西隆寺の遺跡は鎌倉時代には水田と化した。昭和40年代半ばからこの周辺でショッピングセンター建設などの開発が相次ぎ、事前の発掘調査が幾度か重ねられてきた。

まず、昭和46(1971)～47(1972)年度の発掘調査によって、金堂、塔、東門、築地跡など、西隆寺伽藍の中核部が確認された(『報告1976』)。このあと、この地に奈良市による西大寺一条線街路整備事業が計画された。これは近鉄西大寺駅から北東に向かう延長392m、幅員20～28mの道路事業で、先に明らかにされた西隆寺の主要伽藍を南北に縦断するものであった。これまでの調査成果をもとに、金堂をはじめ主要伽藍への影響を考慮して路面を上げ、遺構の保護をはかることで、昭和57(1982)年度に事業認可を受けた。この事業の事前発掘調査のうち、平成2(1990)年度の第221次調査、平成3(1991)年度の第223-4次、第223-21次、第227次、第228次調査は、すでに報告書が刊行されている(『報告書1993』)。また、事業隣接地では不動産会社社屋建設に関連して、平成5(1993)年度の242-12次調査が実施されている(『概報1993』)。

今回、報告の調査区(回数)、面積、期間、調査指導および現地調査担当(*)は以下の通りである。
北面回廊・金堂調査区(第299次) 320㎡ 平成11(1999)年1月18日～3月5日

高瀬要一、千田剛道*、玉田芳英、加藤真二、箱崎和久、山下信一郎(奈良国立文化財研究所)
松浦五輪美* (奈良市教育委員会)

金堂・中門北調査区(第306次) 650㎡ 平成11(1999)年7月1日～9月30日

山崎信二、内田和伸、次山 淳、蓮沼麻衣子*、高橋克壽、吉川 聡(奈良国立文化財研究所)
宮崎正裕* (奈良市教育委員会)

中門・南門調査区(第309次) 406㎡ 平成11(1999)年10月20日～12月28日

高瀬要一、千田剛道*、玉田芳英、箱崎和久、山下信一郎、清水重敦(奈良国立文化財研究所)
宮崎正裕* (奈良市教育委員会)

調査地は、旧秋篠川の氾濫で形成された砂質土層がベースをなしており、西隆寺、平城京条坊などの主要な遺構は、この土層あるいは、その上の整地土上で検出した。以下、年代順に概観する。平城京前の遺構には大型の掘立柱建物、溝、土坑などがある。建物、溝の主軸は大きく北で西に振れる特徴がある。詳細な時期の特定はできないが、周囲から弥生、古墳時代の土器が出土している。平城京(西隆寺造営以前)の遺構として右京一条二坊条間北小路と南北両側溝、坊間西小路と東西両側溝があり、前者は従来の想定位置よりかなり北に寄る事が判明した。区画内には土坑、井戸などがある。土器の他に銀製帯金具、銅鏡などの注目すべき遺物がある。西隆寺の遺構としては金堂、北面回廊に関連する遺構を検出した。金堂の南面に広がる瓦敷とその南側で伽藍中軸線上に灯籠の据え付け穴を確認し、金堂前面の状況が明らかになった。北面回廊については礎石の据え付け穴を検出した。検出位置からみて北面回廊には講堂は取り付かない公算が強くなった。

西隆寺廃絶後の遺構には金堂、中門・南門推定地付近で瓦を大量に廃棄した土坑などがある。